新潟大学国際センター紀要　第６号　13 - 17，2010年　　Journal of the International Exchange Support Center
2010, Vol. 6: 13 - 17 Niigata University

日本語の音声指導事例紹介－その３－
―日本語のピッチ変化の特徴をとらえる―
A Class Report #3
Features of Pitch Changes in Japanese

池田　英喜*
（ikeda@isc.niigata-u.ac.jp）

１．はじめに

従来の日本語教育では、第１拍目と第２拍目の音の高さ（ピッチ）の交代についての説明はあっても、具体的にどのようにピッチの交代が起こっているかについての説明はあまりなされてこなかった。一般にピッチについての説明では、前の音と比べて高い、低い、あるいは同じというだけで済まされ、前の音に比べてどのように高く上がっていくのか、あるいは低く下がっていくのかについては言及されることはない。その結果、ある程度学習が進んだ者でさえも、母語話者の耳には違和感のある日本語の音調で発話するしかないケースが多くみられるのである。

本稿の目的は、日本語のピッチ変化の具体的特徴を示し、そのためのサンプルトレーニングを提示することである。なお音は本稿では基本的にローマ字表記で記した。

２．日本語のピッチ変化の特徴

標準日本語では、単語の第１拍目と第２拍目のピッチの高低は必ず入れ代わる。しかしその入れ代わり方は一様ではなく、無段階的に変化する場合と、一気にピッチが変化する場合がある。本稿では、前者をアナログ型ピッチ変化、後者をデジタル型ピッチ変化と呼ぶことにする。

アナログ型ピッチ変化　①②　①②　analogue（linear）tone change
デジタル型ピッチ変化　①②　①②　digital（non-linear）tone change

ここでは、例外なくピッチの交代が起こるために単語の第１拍目と第２拍目について取り上げているが、ここに挙げたピッチ変化の仕方は、単語の１拍目と２拍目だけに見られることではなく、標準日本語のピッチ変化すべてに当てはまる現象である。

* 国際センター

２．１　アナログ型ピッチ変化

実際に日本語の発話において、アナログ型ピッチ変化が見られるのは、以下の３つの場合である。

① 母音の連続する箇所：追い越し（oikoshi）、 迷子（maigo） など
② 母音に撥音が続く箇所：番号（bangoo）、看護（kango） など
③ 母音に促音が続く箇所：キップ（kiφpu）[1]、カップ（kaφpu）

①の母音が連続する場合は、口の形を徐々に１拍目の母音から２拍目の母音に変化させていくことによって、無段階の音変化が得られる。②の母音に撥音が続く場合は、撥音部で音を引っ張り上げる/下げるようにして無段階変化させる。③の促音が続く場合は、撥音の場合同様に促音部で音を引っ張り上げる/下げるして無段階変化を生むのだが、実際には促音の場合は無音[2]なので、聞き手にはデジタル式ピッチ変化同様に聞こえることになる。いずれにせよ、促音以外では音が途中で途切れず、聞く側には母音ないしは撥音がずっと聞こえていることがその特徴である。

２．２　デジタル型ピッチ変化

アナログ式と違い、基本的には母音の連続が子音によって妨げられることが一番の特徴である。その結果、ピッチ変化が無段階的に徐々に起こったようには聞こえず、突然ピッチが変化したように感じられる。特に注意を払う必要がある子音は以下のとおりである。

① 母音に閉鎖子音が続く箇所：昔（mukashi）、 花月（kagetsu） など
② 母音に摩擦子音が続く箇所：小細工（kozaiku）、傘（kasa） など
③ 母音に鼻音子音が続く箇所：山（yama）、たぬき（tanuki） など

①の閉鎖子音、②の摩擦子音が１拍目の母音に続く場合は、いずれも日本語らしさを消しかねないケースである。本来母音を連続して響かせた方が日本語らしい音のつながり[3]を作ることができるのだが、閉鎖、摩擦いずれの子音もこれを邪魔するものである。言い換えれば、波のように続く母音の連続性を断ち切る存在である。そのためこの閉鎖音や摩擦音があまり強いと、日本語らしさが失われてしまう。そのためか、ロック歌手[4]が日本語で歌を歌う場合に、この閉鎖摩擦子音を強めて歌う傾向が非常に強い。

③の鼻音子音は、鼻音を少しでも引っ張ると撥音が間に入っているような印象を与えてしまい、結果として違う単語を発話していることになる。例えば、「海女（ama）」と「按摩

[1] 促音として、次の音を出すのを１拍分がまんする記号として、便宜上［φ］を用いた。
[2] 摩擦子音が出現する場合もあるが、ここではとりあえず無音として扱う。
[3] 私は「音の波」と読んでいる。
[4] Ｂ’ｚのボーカリストの稲葉浩志氏の歌い方はこの典型例といってよい。

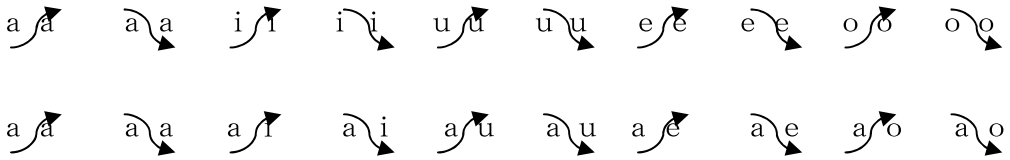
（amma)」の場合などがそれに当たる。２拍目の子音の［m］を少しでも伸ばしてしまうと後者の「按摩」になる。そのため実際には、１拍目と２拍目の間に小さく息継ぎ[5]をさせると聞き手に間違えられることはない。

３．実際の指導方法

以下に、日本語のピッチの上げ下げについて、新潟大学の日本語クラス[6]で実施した練習方法をいくつか紹介する。

３．１　連続母音発声トレーニング

母音だけで発声させる練習をまず行った。まず同じ母音でアナログ式にピッチの上げ下げを行い、続いて２拍目の母音を変えて、やはり同様にアナログ式にピッチの上げ下げをさせた。その際、１拍目の母音もａｉｕｅｏと、順に変えて行った。



実際に使用される単語での具体例は以下の表に示した。

１拍目	２拍目	単語↑	単語↓	参考
a	a（長音）	ハート	カート	
	i	バイト	合図	
	u	阿吽	アウト	
	e	蝿	前歯	
	o	羽音	和音	
i	a	試合	リア	
	i（長音）	ビーサン	ビーチ	
	u	機運	悲運	
	e	見栄	三重	
	o	塩	イオン	
u	a	具合	ルアー	
	i	部員	睡魔	
	u（長音）	空中	ルール	
	e	上	杖	
	o	無音	―	

[5] 息継ぎをさせるということは、他の場合と同様に、母音の連続性を断ち切るように発話させることに他ならない。つまり、デジタル式ピッチ変化は、母音の連続性を断ち切るピッチ変化と考えられる。

[6] 2009年実施「日本語Ｅ（留学生基本科目）」

1拍目	2拍目	単語↑	単語↓	参考
e	a	世阿弥	レア	
	i	―	エイ	
	u	値動き	稀有	
	e（長音）	敬語	警護	
	o	瀬音	ネオン	
o	a	素案	モアイ	
	i	恋人	ドイツ	
	u	負う	―	
	e	吠え面	声	
	o（長音）	相談	倉庫	ト音記号

※―は実例が探せなかったところ

3．2　複合語を利用したピッチ変化の習得

1つの単語には1箇所しかピッチの高いところが出てきてはいけないということを利用した、ピッチ変化の練習を以下の複合語を用いて行った。

	単語	単語	複合語
1	新潟	大学	新潟大学
2	大学	教育	大学教育
3	教育	活動	教育活動
4	活動	領域	活動領域
5	領域	侵犯	領域侵犯
6	侵犯	対策	侵犯対策
7	対策	グループ	対策グループ
8	グループ	貿易	グループ貿易
9	貿易	会社	貿易会社
10	会社	環境	会社環境
11	環境	政策	環境政策
12	政策	研究	政策研究
13	研究	予算	研究予算
14	予算	配分	予算配分
15	配分	計算	配分計算
16	計算	問題	計算問題
17	問題	行動	問題行動

もともと２拍目で上向きのアナログ型ピッチ変化を起こす単語は、複合語の後半部分になった場合、同じ箇所で、下向きのアナログ型にピッチ変化を起こし、同様に上向きのデジタル型ピッチ変化を起こす単語は、やはり同じ箇所で下向きのデジタル型ピッチ変化を起こす。

これは後半部分の単語だけに言えることではなく、１拍目で下向きのピッチ変化を起こす単語が複合語の前半部分として出現した場合も、同じ箇所でアナログ型はアナログ型の、デジタル型はデジタル型の上向きのピッチ変化を起こす。

４．まとめ

今回は、アイデアと方法の提示だけに留まった。授業では学生の実際のトレーニングを録音してあるので、次稿ではこのトレーニングで実際にどのような効果をあげることができたかを報告する予定である。また、この紀要に私の研究生であるグセイノーヴァ・スヴェトラーナ氏が、本トレーニングを受けて実際にどのように自分の日本語が変化したかを報告しているので、そちらもあわせてご一読願えればありがたい。

参考文献

池田英喜（2008）「日本語の音声指導事例紹介－その１－―ベトナム語母語話者の場合―」『新潟大学国際センター紀要』第４号：31－37
池田英喜（2009）「日本語の音声指導事例紹介－その２－―中国語母語話者の指導から見えてきたもの―」『新潟大学国際センター紀要』第５号：32－36
窪薗晴夫（2006）『アクセントの法則』岩波科学ライブラリー 118、岩波書店
坂野信彦（1996）『七五調の謎をとく　日本語リズム原論』大修館書店